九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『子どもの育ちと生活体験の輝き』　正平辰男・永田誠・相戸晴子 著

田代, 直人
山口学芸大学教育学部

https://doi.org/10.15017/26719

出版情報：生活体験学習研究. 11, pp.65-66, 2011-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第11号　65－66（2011）

『子どもの育ちと生活体験の輝き』

正平辰男・永田誠・相戸晴子

１．本書のねらい

筆者はかつて旧庄内町（現福岡県飯塚市）の生活体験学校を訪問した経験があり、このことも手伝ってか、本書を興味深く読めた。

まず本書のねらいから紹介してみよう。本書の＜はじめに＞において、執筆代表者の正平辰男氏は「先に出版した『生活体験学習入門』（1995.３、北大路書房）、『通学合宿・生活体験の勧め』（2005.11、あいり出版）に続く３冊目の通学合宿の勧めである。…今回は、前著刊行から４年を経過して、一つは（飯塚市と）合併した後の生活体験学校がどう変わったかをまとめた」とそのねらいを説明している。正平氏は旧庄内町の生活体験学習事業の当初から今日に至るまでの中心的な指導者であるとともに、実践的研究活動を一貫して推進してこられた。その成果を世に問うことが本書のねらいの一つである。

さらに正平氏が「通学合宿の教育効果を検証する二つの研究論文を掲載した」と記されているように、本書の今ひとつのねらいは、旧庄内町の生活体験学習事業に関する相戸晴子氏と永田誠氏を中心とする実証的研究成果を公表することにある。これは生活体験学習研究の一層の深化・発展をねらった、新しい企画であると言えよう。

本書の主要なねらいは、以上の２点にある。

２．本書の構成

上記のようなねらいに沿って、本書は次のような構成となっている。

はじめに
序章　通学合宿の誕生
Ⅰ章　市町村合併後の生活体験学校
Ⅱ章　通学合宿論考
Ⅲ章　生活体験と自尊意識・学力
　　～庄内調査の示すもの～
Ⅳ章　事例考察～県内外の通学合宿
終章　朝原良行先生への悼詩

なお最後に資料編として、「チャレンジ合宿参加者募集（飯塚市）二・三・四・五・六年生」など７点が紹介されている。

３．生活体験学習研究発展の観点からのコメント

上記の各章のうち、序章は通学合宿研究の基礎的資料の提示であり、またⅠ章は市町村合併後の生活体験学校の経営と活動実践の解説であり、共に興味深いところである。さらにⅣ章の事例の紹介と考察は参考に値すると思う。

ここでは一層の研究発展の観点から、Ⅲ章にスポットを当ててコメントしてみよう。この章は２本の学術論文から成っている。一つは相戸晴子氏執筆の生活体験と自尊意識の関係を中心とする調査研究である。今一つは永田誠氏執筆による生活体験と学力等に関する調査研究の成果である。

前者に関しては旧庄内町の中学１年生190人を対象とした「友達や家族との人間関係」、「基本的生活習慣」、「悩み」、「仕事や生活スキル」といった生活全般に関する調査研究（調査時期は2004年および2005年）である。そして調査の結果を自尊感情の低位群と高位群にグルーピングして比較考察を行っている。

後者は庄内小学校の３～５年生を対象とし、平成16年度～平成18年度にかけての３ヵ年にわたる調査研究である。この調査では、①子どもの生活体験の３ヵ年にわたる時間的変容②子どもの生活体験と学力の関連③子どもの生活体験と通学合宿への参加の

関連にスポットが当てられている。

これらの研究に注目した理由は、正平氏の「二つの論文は、通学合宿の長い実践を積み重ねてきた旧庄内町の生活体験と教育効果の関係性を明らかにしようとするもので、初めて組織的に実施した調査結果である。長い間待たれていた研究であり、…」との指摘にも見られるように、生活体験、とりわけ通学合宿体験の教育効果に関する調査に基づく実証的研究への取り組みを評価したいと考えたからである。

生活体験の教育効果に関する実証的研究は、厳密に考えれば種々の困難を伴うものである。この点を十分踏まえつつ、今後、生活体験学習に関する調査研究が一層推進されるよう、期待したい。

４．キャリア教育推進の観点からのコメント

正平氏が執筆されたⅡ章にもキャリア教育推進の観点から注目したい点がある。例えば、この章の「７．生活体験の欠損と過剰がもたらす教育困難」の中に、「通学合宿を通して見える子どもの欠損体験は３つのことが際だっている。最大最高の特徴は、「働く、生産する」ことをほとんど教えられていないことである。それも、汚れることをいとわず働く、生産すると言う体験は皆無に近い」(102ページ）との記述が見られる。

今日、ニート問題が深刻化している。総務省統計局の調査によれば、ニート（この場合は「若年無業者」を指している）の数は実に62万人（平成19年）に上っているとのことである。この問題の背景は種々考えられるが、上記のような正平氏の指摘に見られるような子どもの生活体験の貧弱化現象と教育のあり方に有力要因の一つがあると考えられる。

ところで、高校生や大学生になって、いきなり職業的自己実現の根幹をなす勤労観・職業観の形成を強調しても遅いと思う。幼児期を含む子どもの頃から、働くことの喜びや将来の職業への夢を膨らませるキャリア教育が不可欠であろう。また、キャリア教育は勤労体験的な学習ばかりではなく、生活全般に関する幅広い豊かな体験学習等を通して、人間関係能力（自他の理解能力、コミュニケーション能力)、情報活用能力（情報収集・探索能力、職業理解能力)、将来設計能力（役割把握・認識能力、計画実行能力)、意思決定能力（選択能力、課題解決能力）などの育成をねらいとしている（文部科学省『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き』参照)。このようなキャリア教育推進の観点から、本書で紹介されている旧庄内町での食事の準備、農耕体験、動物の飼育、ドングリ種苗体験など、生活体験活動の全体（そのねらいを含む）が正当に位置づけられねばならないと思う。

なお、あえて付言すれば、キャリア教育は学校教育ばかりでなく、旧庄内町の事例にも見られるように社会教育においても推進されるべきである。さらに学校教育と社会教育の連携による質の高いキャリア教育の展開が期待される。

５．まとめ

本書を読み返している最中に、かのデューイの「１オンスの経験は、正に１トンの理論に優る。なぜならば、いかなる理論もただ経験においてのみ生きた、確認が可能な意義をもつからだ」(J. Dewey, Democracy and Education, Free Press, first free paperback edition. 1966. p.144）との、周知の指摘を思い起こした。同時に、この経験の意義に関する指摘に基づき、生活体験学習の教育学的意義と重要性について、改めて考える機会を得た。

今後も旧庄内町の生活体験学習事業が着実に継続され、発展するとともに、その研究成果の大いなる蓄積を期待しつつ、本書の書評を閉じたい。

[あいり出版、2010年、2,500円＋税]

(山口学芸大学教育学部　田代直人)